Working Paper Series No.30

フリホリー・クペツィキーと日本人
――1937 年のウクライナ民族主義者組織グループ来日とハルビンでの活動――

神戸学院大学経済学部
岡部芳彦

2021 年 9 月

THE ECONOMIC SOCIETY OF KOBE GAKUIN UNIVERSITY

フリホリー・クペツィキーと日本人
――1937 年のウクライナ民族主義者組織グループ来日とハルビンでの活動――

1　はじめに

近年、1932 年 11 月にウクライナ民族主義者組織 OUN がポーランド統治下のリヴィウのホロドク郵便局を襲撃した事件を題材にした映画の公開が続いている[1]。その襲撃の参加者の一人がフリホリー・クペツィキーである。本稿の目的は、そのクペツィキーが率いたウクライナ民族主義者組織グループの 1937 年の来日と満洲のハルビンでの活動にくわえて、日本人との関係について明らかにすることである。

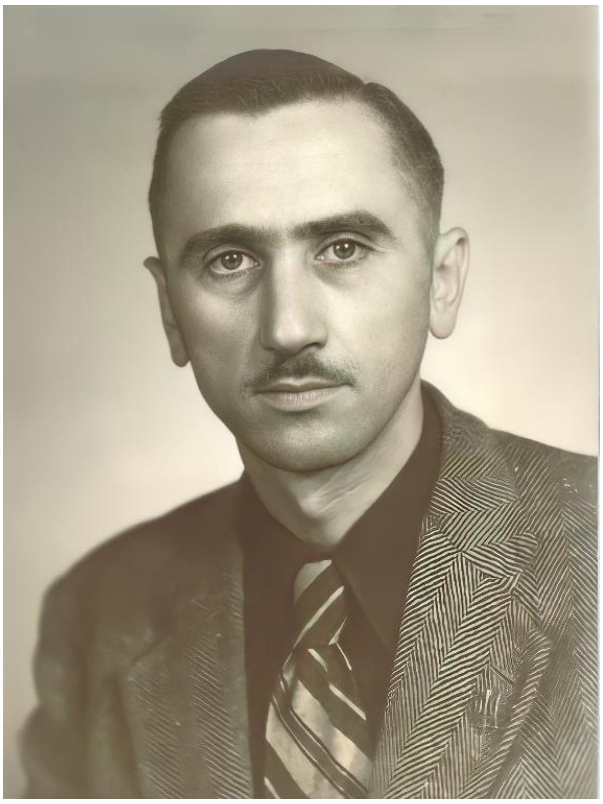
OUN は 1929 年 1 月 28 日から 2 月 3 日にかけてオーストリアのウィーンで結成され、ポーランドやソ連からの独立したウクライナ国家樹立を目指した組織である。1938 年に指導者のイェヴヘン・コノヴァレツィがソ連の工作員によって暗殺された後は、アンドリー・メリニュークとステパン・バンデーラのグループ間で主導権争いが起こった。第二次世界大戦中は、ウクライナ国民評議会に参加し独立を目指す者や、ドイツ側に協力する者など対応が分かれた。戦後は、西側の情報機関と協力しながら活動を続けた[2]。1930 年代に OUN と駐ベルリン日本大使館関係者との接触があったことは、これまで先行研究でも触れられてきた。30 年代を通じて駐ドイツ日本大使館駐在武官であった大島浩少将の下で、臼井茂樹中佐、馬奈木敬信大佐らが OUN の幹部であったリコ・ヤリを通じて、コノヴァレツィと接触を続け[3]、反共戦線を構築するため東京へ OUN の使節を派遣することを提案していた[4]。

OUN と日本側の接触やクペツィキーらのハルビンでの活動については、ミコラ・ポシブニチの詳細な研究がある[5]。一方、黒川祐次は、アルカージ・ジュコフスキ―の『ウクライナの歴史』に典拠しつつ、日本の軍部と OUN などのウクライナ独立派との関係は「目下これ以上の肉付けはできない」としている[6]。ペトロ・ミルチュークの『ウクライナ民族主義者組織の歴史』にもハルビンで発行された OUN の印刷物についての記載があるものの、そこでの具体的な活動内容についてはあまり触れられておらず[7]、ウクライナ民族主義者組織と日本側との間で具体的にどのような接触があったのか、またどのような経路で来日し、ハルビンでどのような日本人と出会い、いかなる活動が行われるようになったのかはほとんど分かっていない。

そこで、本稿では 1937 年に来日し、日本軍部の手引きでハルビンへ渡った OUN グループのリーダーであったクペツィキー（通称ジュラ、**図 1**）を中心に[8]、その具体的な活動内容と彼が出会った日本人について見てみたい。本稿の史料は、1988 年にカナダのトロントで出版されたクペツィキーの回想録『日出ずる処』[9]、およびハルビンのウクライナ語新聞『満洲通信』の編集者であったイヴァン・スヴィットの回想録『日本とウクライナの相互関係 1903–1945 年』である[10]。ポシブニチも同様の史料を用いているが、ウクライナ国内外の先行研究では、そこに登場する日本人はそれらの回想録に基づき姓のみの記載で、人物が全く特定されていない。そこで本稿では、満洲国の官吏録や関東軍情報部（ハルビン特務機関）

の人名簿といった日本側の史料を用いて日本人を可能な限り特定し、クペツィキーの親族より新たに提供された未公開の写真も参考にしながらウクライナ民族主義者組織のハルビンにおける活動や日本人との関係の実像を明らかにしたい。

図 1　フリホリー・クペツィキー



【出典】レーシャ・ジュラ氏蔵（1930 年代後半～1940 年代前半）。

２　クペツィキーとホロドク郵便局襲撃事件

1932 年 11 月 30 日、 ポーランド統治下のリヴィウのホロドク郵便局が OUN グループ 11 名によって襲撃された。それまで OUN は、ポーランド警察幹部や要人の暗殺と平行して、活動資金を得るため郵便局の襲撃を繰り返していた。

ホロドク郵便局襲撃は、ウクライナ軍事組織 UVO を率いていたロマン・シュヘービチによって各地から 11 名の過激派が選ばれた。当初の計画では、11 月 29 日火曜日の午後 4 時 55 分以降に行われることになっていた。襲撃メンバーは決められた時間に、人里離れた場所で合流したが、予備の弾薬が用意されていなかったため、襲撃を翌日に移さざるをえなかった。

11 月 30 日水曜日の夕暮れ前に、5 人と 6 人の 2 つのグループに分かれた襲撃グループはホロドク郵便局に、4 時 55 分に侵入した。襲撃グループの想定とは異なり、郵便局の警備員は武装していた。襲撃グループがホールに入り、手を上げるように呼びかけるとすぐに、

反撃された。銃撃戦でユーリィ・ベレジンシキー、ヴィロディーミル・スタリクの2名が命を落とし、クペツィキーは腕を負傷した。フリホリー・ファイダのグループはリヴィウ方面に逃走し、ドミトロ・ダニリーシン、ヴァシリ・ビラスはステファン・クスピシと一緒にフリンナ・ナヴァリア駅行の電車に乗り、2手に分かれて撤収した。ダニリーシンとビラスはコチャフ駅で、ホロドク襲撃犯を追って検問中の2人の警官に身分証の提示を求められた。ダニリーシンはパスポートを提示するふりをして銃を取り出し、警官1名を射殺、もう1人に重傷を負わせ逃走した。その後、ロズバディフ村（現リヴィウ州）で、銃を所持していた彼らを強盗と勘違いしたウクライナ人農民に囲まれ袋叩きにあった。地元司祭が仲裁に入り、彼らも自分たちがウクライナ軍事組織のメンバーであると主張したが、ポーランド警察が到着し、リヴィウに連行された[11]。

ドミトロ・ダニリーシン、ヴァシル・ビラスに加えマリアン・ジュラキフシキーの3人は逮捕され、また事件の共犯で告発されたゼノン・コサックとともに1932年12月17日から22日にかけてポーランド当局によってリヴィウで裁判にかけられた。襲撃に参加した3名には死刑判決が下され、そのうちダニリーシン、ビラスは23日に処刑された[12]。結果として、ウクライナ民族主義者組織によるホロドク郵便局襲撃は失敗に終わり、2名が銃撃戦で死亡し5名が負傷、2名が処刑された。

図2　フィリクディ島でのOUNグループ

【出典】レーシャ・ジュラ氏蔵（右からクペツィキー、イタリア人教師[氏名不詳]、フナティフ、クサーク）。

一方、銃撃戦で腕を負傷したクペツィキーは、同じく負傷したファイダとともにイタリアへ逃亡することに成功した。1934 年から 2 年半にもわたり、シチリアのフィリクディ島などに滞在し（**図 2**）、リパリ島にあったクロアチアの民族主義組織ウスタシャのキャンプでミハイロ・コロジンスキー、ミハイロ・フナティフ、フリホリー・ファイダ、レヴコ・クリスコ、ロマン・クサークらとともに軍事訓練を受けた[13]。ベルリンで日本軍武官と接触のあった OUN 指導部はこの中から、ホロドク郵便局襲撃に参加したクペツィキーとファイダ（通称ボンバ）、ポーランドの政治家タデウシュ・ホロウコの暗殺を試みたミハイロ・フナティフ（通称チョールヌイ）を選んだ。彼らの派遣目的は、極東の OUN 幹部と連絡を保ち、活動を活発化させることであった。OUN は 1934 年にオメリアン・フメリオフシキー（別名ボリス・クルクチ）[14]、1935 年にミコラ・ミトリュク（別名ボフダン・ルコベンコ）とミハイロ・ザティナイコ（別名ロマン・コルダ＝フェドリフ）[15]をウクライナ・ディアスポラが多数住んでいた満洲のハルビンへ送り込んでいた[16]。ミトリュクが、1936 年にアムール川を越境した際にソ連側からの銃撃を受け死亡し、ミハイロ・ミルコが OUN の極東代表となった。OUN は、ミルコらと連携をとり満洲での活動を活発化させるため、クペツィキーらを、日本を経由してハルビンに派遣することにしたのである。クペツィキーらはそれ以上の指示は受けていなかったようであるが、OUN の一部となっていたウクライナ民族主義者連合（PUN）の指導者から日本側から「国境を越えてソビエト連邦に入るよう求められた場合は拒否し、この場合、ウクライナ民族主義者組織 OUN の指導者との合意に達しなければならないと言って正当化すること」という指示を受けていた[17]。

次節では、まず OUN グループが来日、ハルビンへ到着した経緯とクペツィキーが出会った日本人について考察するとともに OUN グループとハルビンのウクライナ人居留民会やウクライナ民族の家（ウクライナ・クラブ）との関係についても見てみたい。

３　クペツィキーの日本と満洲における活動

（１）ウクライナ民族主義者組織の来日からハルビン到着まで

本節ではクペツィキーの回顧録『日出ずる処』を基に OUN グループの日本や満州での活動について見てみたい。同書には、それぞれの出来事について、具体的な日付等は書かれていない場合も多い。一方、出会った日本人の名前については、スヴィットの回想録と一致することも多く、ある程度正確であると思われる。他の史料で可能な限り情報を補いつつ検討したい。

1937 年 10 月頃、クペツィキー率いる OUN グループは、ナポリで日本郵船の香取丸に乗船し（**図 3**）、スエズ運河を通過し、コロンボ、シンガポール、香港を経由して 6 週間かけて神戸港に到着し、下船して散策したのちに、横浜港へ向かった[18]。

図 3　「香取丸」船上の OUN グループ

【出典】レーシャ・ジュラ氏蔵。最後列左から 2 番目がクペツィキー、右から 3 番目がフナティフ。

横浜に着くとすぐに、満洲国の首都新京から彼らに会うために帰国した「ウガイ将軍」と面会し、山王ホテルに滞在した。これは当時、中佐であった鵜飼芳男と思われる。鵜飼に連れられて山王ホテルに行くと秋草俊ら 3 名がスーツ姿で出迎えた[19]。ハルビン特務機関での勤務を終えていた秋草は当時、兵務局付きで、防諜研究所（のちに後方勤務要員養成所を経て陸軍中野学校）開設の準備をしていたと思われる[20]。クペツィキーのみロシア語を話せなかったのでウクライナ語で、秋草はロシア語で答えた。秋草とは毎日電話をし、隔日で面会して満洲ではどのような活動を行えるのか聞いたが明確な答えはなく、ロシア語を学び、ソ連の情報について精通するようにと言われた。クペツィキーは秋草からかつてハルビンで活動をしていたことを聞き、自分たちよりハルビンのウクライナ・コミュニティについて遥かに詳しい印象を受けた。ある日、秋草にボフダン・ルコベンコ（ミコラ・ミトリュク）とロマン・コルダ＝フェドリフ　（ミハイロ・ザティナイコ）を知っているかと聞かれた。さらに秋草は、コルダ＝フェドリフは暴力的なウクライナ・ナショナリストで、ハルビンで多

くのトラブルを引き起こし、ロシア人とも小競り合いがあり、そのため欧州へ送還しなければならないと述べた。クペツィキーが驚き、ではなぜ OUN の我々が呼ばれたのかと聞いたところ、秋草は「あなた方は地下で活動する。ロシアの姓で生活し、ハルビンでのウクライナ居留民の生活には参加しない。その役割はコルダ＝フェドリフが現在行っている」と述べた。クペツィキーは驚きコルダ＝フェドリフも自分たちも同じ OUN に属していると答えて会話が終わった。後日、コルダ＝フェドリフがハルビンに留まることになったことを秋草は伝え、クペツィキーは OUN メンバーの団結を試されたと感じた[21]。

クペツィキーによれば、日付は不明だが、ホテルで寺内寿一との会食があった。事前に計画されたものであったかは分からないが、寺内がドイツ語で乾杯の音頭をとったことなども具体的に記載されている[22]。クペツィキーは山王ホテルが二・二六事件の舞台となったことを知っており、寺内はその時に陸軍大臣であったとも記述している。事実であれば、日本側の OUN に対する大きな期待が窺える。

日本出発前には、日本当局より偽名が与えられており、ミハイロ・フナティフ（通称チョールヌイ）はセルゲイ・イヴァノヴィッチ・ヴァシリフ、クペツィキーはボリス・セミョーノヴィチ・マルコフ（ウクライナ読み：マルキフ）を名乗った[23]。37 年 11 月末、東京を列車で出発し、大阪、神戸、広島を通って下関に到着した。下関でドイツ語を話す憲兵のチェックを受けたのちに乗船、釜山に到着した。その後、列車で大連に向かい、そこで日本当局関係者と合流したのちに、11 月 27 日に満洲の新京に到着した。

翌日、鵜飼と面会した際、新京にはほとんどヨーロッパ系住人がいないので、ハルビン特務機関のあるハルビンへ彼らが行くことを告げられた。日本当局の連絡係がウクライナ人と話したいか聞いてきたので、クペツィキーは熱望した。しばらくして現れたのは電信・電話技師のアナトリ・ティシチェンコであった（図 4）。その際、ティシチェンコが語った経歴は以下のようなものであった。1910 年生まれで、父親の記憶はなく、コムソモールを経て共産党員に至るまで、典型的な共産党の組織に属して電話と電信のエンジニアとしての教育を受けた。ハルキウ地域の電信・電話の責任者の一人となり、結婚していて子供がいた。ウクライナの共産党幹部にも人脈があり、しばしばキーウとモスクワを訪れることも多かった。ウクライナ化で大きな成果を見て、ソ連の明るい未来を信じるようになった。しかし、ウクライナの飢饉、いわゆるホロドモールの後、疑問を抱くようになり、彼の出身地ポルタヴァでの反ソ連ビラの作者として疑われ、ハルキウに戻ったときに党を除名、逮捕されて、大した証拠もないまま、6 年の刑を宣告されシベリアに送られた。家族はウクライナに残り、ティシチェンコはその消息を知らなかった。彼自身、専門家として、そこに建設されていた新しい鉄道に沿ってシベリアを通る新しい電話回線の建設の責任者に任命された。流刑者であったが任務を忠実に遂行したため、シベリアでの生活環境は良かった。仕事のため頻繁に旅する機会があったため、1937 年の夏にソ連から脱出した[24]。

図 4　アナトリ・ティシチェンコ（別名クヴィチェンコ、ヂブローワ）

【出典】レーシャ・ジュラ氏蔵（1938 年頃撮影）。

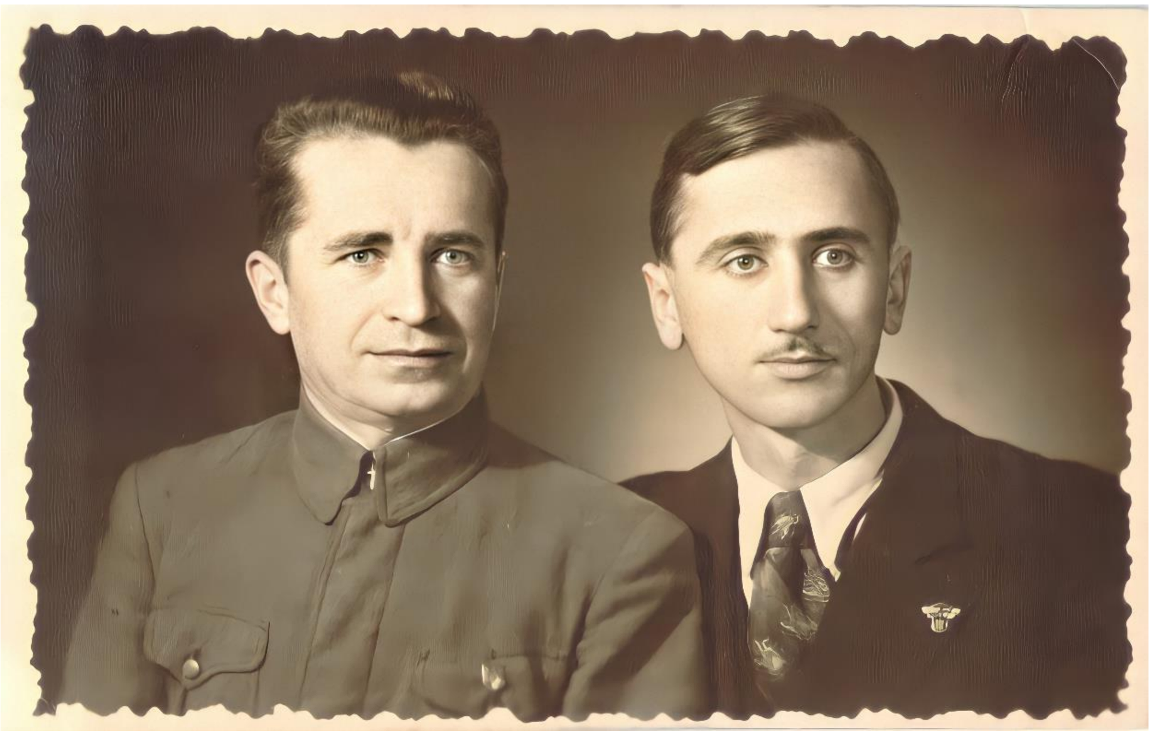
ティシチェンコは、日本当局が自分を信頼せずに他のウクライナ人から完全に隔離していることに対してクペツィキーに不平を言った。また、電話回線や電信を構築する技術やソ連に関するすべての情報を頻繁に聞かれ、日本側に多くの資料を与えたと語った。また、機会があれば、ウクライナ人の社会的、文化的および政治的活動に参加したいことなどを 3 時間にわたり話し、クペツィキーはティシチェンコに非常にいい印象を持った。

ティシチェンコはクヴィチェンコという姓も使っており、その経歴に謎が多い。1938 年に関東軍参謀部が作成した『入蘇入満調査』によれば、「ティジェンコ・アナトリー・ペトロウィチ」は 1937 年 4 月 13 日に黒河省奇克県から入満した。理由は「粛清事件に連座し家族が連行せられしを以て危険を感じ」たためであった[25]。一方、白系露人事務局には 1940 年に「クヴィチェンコ」として登録されている[26]。クペツィキーによれば、ティシチェンコは、1944 年に新京・ハルビンで刊行された世界初の『ウクライナ・日本語辞典』の編纂者の一人「ヂブローワ」でもあった。その辞書の執筆者の中のタチアナ・クヴィチェンコが配偶者であり、ティシチェンコは、結婚した後は配偶者の姓クヴィチェンコを使っていたと思われる[27]。1941 年 10 月 29 日にハルビンで撮影された写真では、ティシチェンコ改めクヴィチェンコは、満洲国の協和服を着用し、左胸にはウクライナの国章トルィーズブの記章を付けて

いる。写真には、クヴィチェンコによって「良き同郷人アナトリより」とクペツィキーに対して裏書されており 2 人の深い関係が窺える（**図 5**）。のちにクペツィキーとクヴィチェンコは、ハルビン生神女庇護教会（ウクライナ寺院）で、ミコラ・トゥルファニフ神父立ち会いの下、義兄弟の誓いを立てた[28]。

以上のような経緯・経路で日本に到着し満洲に渡ったクペツィキーであったが、次項では彼が出会った日本人についてさらに見てみたい。

図 5　満洲国協和服を着るクヴィチェンコ（ティシチェンコ、チブローワ：左）と クペツィキー（右）



【出典】レーシャ・ジュラ氏蔵（1941 年 10 月 29 日撮影）。

（２）クペツィキーと日本人

表 3－1 は、『日出ずる処』を基に、クペツィキーが接触した日本人を年代順にまとめたものである。スヴィットの著作『日本とウクライナの相互関係 1903 –1945 年』も日本人については姓のみ記載が多かったが、クペツィキーの回顧録も同じで名前が書かれているものはなく、それぞれの日本人の詳細についてははっきりとしない。そのため確認できない場合は姓をカタカナで記載している。一方、その他の史料と照合して可能な限りで官姓名や所属を付記した。また、表 3－2 として、ハルビン特務機関の歴代ウクライナ担当者も分かっている範囲でまとめた。

クペツィキーと関係があった日本人は、ほとんどがハルビン特務機関ないし日本当局関

係者であった。ハルビン特務機関はウクライナ人対策の予算を確保していた。例えば、1935年に策定された「対蘇諜報機関強化計画」には、「白系露人操縦費」とならんで「ウクライナ操縦費」として月額400円あまりが計上されている[29]。その目的は「北満在住の〈ウクライナ〉人の謀略的価値向上を促進し蘇領内同民族との連絡法を確立し有事の日、反蘇運動を誘致し得る如く具体的案を研究せらる」ためであった[30]。

ハルビン到着当初に、クペツィキーが最も関係が深かった日本人は「イノウエ」であった。ハルビンに到着したクペツィキーらは、最初に接触した日本人の自宅で、イノウエを紹介された。イノウエはハルビン特務機関所属であると名乗り、クペツィキーらの担当者であることを告げた。イノウエはスヴィットの回顧録にも登場し、前任の堀江一正からハルビン特務機関のウクライナ人担当を引き継いでいた[31]。スヴィットによれば、イノウエは「満洲国高等裁判所」勤務で、年齢は若く、ロシア語が非常にうまく、また自由主義を嫌い陸軍の皇道派に近い立場をとっていた。イノウエとスヴィットは荒木貞夫の武士道に関する著作の翻訳を行った[32]。1939年の『満洲国官吏録』の中でハルビンの法務関係部門で「イノウエ」姓は1名のみであり、哈爾賓高等法院の翻訳官として井上喜久三郎の名前が見られる[33]。「関東軍情報部五十音人名簿」にも「ハルピン支部」所属で同姓同名の記載があり、井上と考えて間違いない[34]。1910年6月9日生でスヴィットと会っていた時期は27歳前後で、「若くロシア語が堪能」という記述とも合致する。同人名簿によれば1948年11月時点でシベリア抑留中であった[35]。また1955年10月8日の『朝日新聞』には、野溝勝を団長とするソ連訪問国会議員団が「ハバロフスク戦犯収容所」を視察した際に、家族に「手紙を託した人たち」の中にも名前があり、長期抑留されていたことが分かる[36]。

井上はクペツィキーらを自宅に招き妻を紹介し夕食を共にしながら、特務機関からの毎月、手当として100円が支払われることを説明し、また翌日、ニコライ大聖堂の前で落ち合って、2年間有効の移民パスポートを手渡した。クペツィキーが記した井上とのやり取りは興味深い。井上はドイツのパスポートを渡すことも提案している[37]。クペツィキーと井上はコノヴァレツィが暗殺される1938年5月頃までは頻繁に連絡を取り合っていた。

井上の次のハルビン特務機関ウクライナ担当は「アカキ」である。クペツィキーによればアカキはウクライナ人居留民会参与で、クペツィキーらOUNグループの直属の担当者であった。アカキとは、関東軍情報部第4班開設以来「身を以て要員養成、特殊移民並びに威力謀略等に参画した功労者」の赤木陽郎通訳官である[38]。先行研究などでは「アカキ少佐」として記載されることもあり、佐官待遇の軍属とされることもある[39]。赤木は「殊に白系工作員等から慕われていたが、終戦と共に敵の軍門に降るを潔しとせず[40]」、ハルビン特務機関の前で自決したと言われている[41]。「関東軍情報部五十音人名簿」には、1945年8月17日に戦死と記載されている[42]。赤木は、スヴィットの著作にも登場している。赤木はクペツィキーらOUNの方針に異を唱えることも、しばしばあった。1942年初頭にクペツィキーらがハルビンでOUN機関紙『スルマ』[43]のハルビン版を発行しようとしたところ、赤木に反対された。一方、赤木は白系露人事務局参与も務めており、クペツィキーらに同事務局との協力

も促した。

赤木は、ハルビンから 20km の地点にある難民を中心とした収容所にいるウクライナ人約 500 名の名簿を提供した[44]。1942 年 5 月末、キャンプ近くの使われていない火葬場で、目立たぬようウクライナ系難民の面接を始めた。日本当局の表立っての目的は、ソ連側のエージェントではないかの確認をさせることであったが、赤木からは、彼らの世話をクペツィキーらに任せ、自由に使っていいと伝えられた[45]。

クペツィキーの回顧録からはハルビン特務機関、のちの関東軍情報部と OUN グループの協力関係がどの時点で、どのように、またなぜ打ち切られたのかはっきりとしない。きっかけの一つは、「白系露人事務局の防衛組織」への参加を打診され、断ったことであった。日本当局は 1942 年後半頃から OUN との協力を徐々に縮小し、赤木からの連絡も途絶えた。1945 年 8 月、ソ連軍の満洲侵入後、混乱するハルビン市内のホテルのロビーで、白系露人事務局参与でハルビン特務機関のウクライナ担当のマエダと一緒にいた赤木と偶然に再会する。再会を喜ぶクペツィキーは 1942 年に、なぜハルビン特務機関は OUN との協力を打ち切ったのか尋ねたが、赤木は答えられないと告げる一方、マエダは「勝利が来るまでウクライナのための闘いを続けてください」と言った[46]。

ハルビン特務機関最後の担当者であった松坂は、ソビエト軍がハルビンに迫る中、クペツィキーの自宅を訪問した。金、貴金属、ルーブル紙幣、米ドル、英ポンドなどの外貨、アヘン、銃などの提供を約束し列車での脱出を支援した。クペツィキーは、これは秋草の決定か尋ねたが明確な答えはなかった。クペツィキーらのほか、白系露人事務局幹部なども乗ったハルビン特務機関が用意した特別列車は、新京を経由して天津へと到着した[47]。

ハルビン特務機関の関係者で、クペツィキーに好意的であったのは「ハルビン警察外事担当主任」の「サワダ」である。これはハルビン警察庁警佐の澤田斌夫と考えていいだろう[48]。クペツィキーによれば、澤田は平均的な身長よりも小さいが体格が良く、非常に穏やかな丸い典型的な日本の顔をしていた。絶えず笑顔で正確なロシア語を話した。ヴァシリフやファイダが一時所在不明になった際にも、澤田が機転を利かせて対応し、事なきを得ている[49]。また澤田からクペツィキーらが、当初は禁じられていたウクライナ語の書類や手紙を読むことができるようになったと告げられている。1939 年初めから、クペツィキーは頻繁に澤田と会うようになり、澤田の「ウクライナ人居留民会全般と同様に、ウクライナ問題への関心」が衰えることはなかった。また、クペツィキーは、日本人がロシア人を信頼しすぎており、ロシア人は可能な限りその信頼を利用し、結局失望するだろうと述べたところ、その考えに反対はしなかった[50]。その夏、澤田は、横道河子地方警察学校へ校長として転勤することになり、クペツィキーに満洲国の警察官にならないかと提案した[51]。OUN の活動のためハルビンに残らないといけないと告げると、後任の外事担当者と白系ロシア人に用心するように忠告した[52]。

表 1　フリホリー・クペツィキーが関係した主な日本人一覧

名前	時期	クペツィキーの著作での説明	付記
鵜飼芳男	1937 年	ウガイ。日本軍将軍。1937 年、ウクライナ民族主義者組織グループを日本で出迎えた。	1937 年時点は中佐。1940 年大連特務機関長。近衛歩兵第 1 連隊長を経て、長野師団管区付で終戦。最終階級陸軍少将。東京裁判ではアタマン・セミョーノフについて供述。
秋草俊	1937 〜1945 年	アキクサ。1937 年日本到着時に私服で面会。クペツィキーがウクライナ語で話したのに対してロシア語で答える。1945 年にハルビンに戻ってから、ウクライナ人居留民会への対応も和らぐ。	1933-36 年ハルビン特務機関勤務。1937 年時点では陸軍省兵務課付で後方要員養成所（のちの中野学校）の開設を準備。1945 年にハルビン特務機関長として終戦。モスクワへ連行後、過酷な尋問を受け 1949 年死亡。最終階級陸軍少将。
寺内寿一	1937 年 11 月	元帥、元陸軍大臣。来日時、山王ホテルで鵜飼・秋草によって開催された宴席に突然参加。ドイツ語で乾杯の音頭をとる。	伯爵、元帥、陸軍大臣（1936 年３月–37 年２月）。太平洋戦争では南方軍総司令官。1946 年、勾留中に死亡。
ヨシダ	1937 年 11 月	ハルビンで鵜飼がクペツィキーらに会った際に同席。	
ヤマグチ	1937 年	日本滞在時に面会。将軍。	現役の将官（待命含む）とすると、山口三郎？山口鹿太郎？山口直人？ただしいずれの経歴にも特務機関との接点は薄いので、将官ではなかったなどクペツィキーの記憶違いの可能性がある。
井上喜久三郎	1937 〜 38 年	イノウエ。ハルビン特務機関顧問。ウクライナ担当。非常に頭がよく、ロシア語を教えてもらい、毎回会うのが楽しかった。	スヴィットによればハルビン特務機関顧問で、K・ホリエが後任としてウクライナ担当に任命。年齢が若くロシア語が堪能で、満洲高等法院勤務。『満洲国官吏録』には「哈爾濱高等法院翻訳官」として井上喜久三郎の名前がある。また、「関東軍情報部五十音人名簿」にも「ハルピン支部」所属で同姓同名の記載があり、井上と考えて間違いない。1910 年 6 月 9 日生でスヴィットと会っていた時期は 27 歳前後で、その記述とも一致する。1955 年 10 月時点でハバロフスクに抑留中。

マエダ	1937 ～38年頃、1945年	マエダ。井上と一緒にハルビン特務機関でウクライナ担当。白系露人事務局参与も務め、ウクライナ民族主義者にあまり好意的でなかった。 1945年8月、赤木とともにいたハルビン市内のホテルロビーにいたマエダと再会し、激励を受ける。	スヴィットの著作では、マエダはクペツィキーら OUN グループを支援したとされている。白系指導を担当していた前田瑞穂ともイメージが重なるが、終戦前後にハルビン市内にいることができたかは分からない。前田は1945年6月頃までハルビン露語教育隊（関東軍直轄語学教育隊：345部隊）の部隊長であったが、記録上は、終戦時、根こそぎ動員で編成され第136師団の第371連隊長の任にあり、部隊は本渓湖で編成中であった。事件記者の三田和夫によれば、前田は戦後、GHQ 参謀第2部や CIC の下、「園木」の偽名で対ソ諜報活動に従事した。一方、その他の特務機関ウクライナ担当が民間人や軍属であったのに対して、エリート軍人であったのはいささか不自然ではある。なお、「関東軍情報部五十音人名簿」の前田姓は、前田重治（工兵上等兵）、前田義晴（雇人）、前田正重（軍曹、ハルビン本部2班、牡丹江支部）、前田能長（歩兵、黒河支部）、前田三郎（軍属、ハルビン本部）、前田弘之（歩兵少尉、東安支部）、前田健太郎（軍属、ハルビン本部）、前田陽穂（歩兵大佐：前田瑞穂の誤記と思われる）。
山岡道武	1938 年4月～?	イノウエ、マエダの上官。元リトアニアまたはフィンランド大使館勤務経験あり。ハルビンでの日本の特務機関の高官。井上宅で、コルダ＝フェドリフ、クペツィキーらと会談。顔から賢く経験豊富な印象を受け、非常にエネルギッシュだった。流暢なロシア語を話した。	当時、関東軍参謀部第2課参謀。参謀本部ロシア課長、駐ソ大使館付武官を経て、第一軍参謀長で終戦。国民党に協力するため第一軍将兵の山西残留事件に関与。戦後は、国会で同事件について証言した。雑誌にソ連情勢について記事を寄稿した。戦後は静岡県在住。
赤木陽郎	1940 ～42年、45	アカギ。ウクライナ人居留民会顧問。クペツィキーら OUN グループの直属の担当者。	関東軍情報部第4班（要員養成、特殊移民ならびに威力謀略担当）所属の通訳官。佐官待遇

	年	1941年初頭の『スルマ』の発行に反対。白系ロシア人も担当しており、クペツィキーらに協力も促す。	の軍属。白系工作員に慕われるも終戦後、ハルビン特務機関正面玄関口で自決したとも言われる。「関東軍情報部五十音人名簿」には1945年8月17日戦死と記載。スヴィットの著作にも登場している。1909年12月20日生。
澤田斌夫	1938〜40年夏	サワダ。ハルビン警察の外事担当主任。クペツィキーらに非常に好意的。白系ロシア人に用心するように忠告。平均的な身長よりも小さいが体格が良く、非常に穏やかな丸い典型的な日本の顔をしていた。絶えず笑顔で正確なロシア語を話した。マエダと関係を深めるように助言。1939年夏頃、横道河子地方警察学校へ校長として転勤。	ハルビン警察庁警佐、のちに濱江省地方警察学校警佐。
タカシ		ハルビン特務機関関係者。一緒に釣りや映画に出かける仲。	
タカハシ		ハルビン特務機関関係者。	
松坂與太郎	1944 〜45年	マツザカ。赤木の後任のウクライナ担当。ウクライナ人居留民会参与。1945年８月、クペツィキーらに、金、貴金属、ルーブル紙幣、米ドル、英ポンドなどの外貨、アヘン、銃などの提供を約束し（ただし銃は届かず)、特別列車での脱出を支援。	「関東軍情報部五十音人名簿」でマツザカ姓は「(ハルビン)本部防諜班」所属の軍属であった松坂與太郎（1900年1月28日生）のみであるため、この人物であると考えられる。1949年11月時点でハバロフスクに抑留中。なお、スヴィットはマエダの同僚として「マツバラ」と記載している。「関東軍情報部五十音人名簿」で松原姓は「松原貞男」１名のみ見られるが「教育隊、歩兵一（1等兵の意味)」と記載されているため該当しない。スヴィットの誤記と思われる。

【出典】クペツィキー、スヴィットの著作、「関東軍情報部五十音人名簿」、『満洲国官吏録』など各史料を参照して作成。

表 2　ハルビン特務機関の歴代ウクライナ担当者

	担当者氏名	直属上官	クペツィキーの記述
1920 年代～1937 年頃	堀江一正	不明	なし（スヴィットの記述は多い。元陸軍将校、満鉄哈爾賓事務所勤務、満州国外交部職員）。
1937～38 年頃	井上喜久三郎	山岡道武	ハルビン特務機関顧問。ウクライナ担当（スヴィットによればハルビン高等法院勤務）。
1937～38 年頃	マエダ（前田瑞穂？）	山岡道武	ハルビン特務機関顧問、白系露人事務局顧問（スヴィットによればハルビン特務機関のウクライナ担当）。
1938～42、45 年	赤木陽郎	山岡道武～？	ウクライナ人居留民会顧問、白系露人事務局顧問。
1944～45 年	松坂與太郎	秋草俊	ウクライナ人居留民会顧問。

【出典】クペツィキー、スヴィットの著作、各史料を参照して作成。

クペツィキーら OUN グループを統括する責任者は、小野内寛らと満洲国軍の白系ロシア人部隊「浅野部隊」の創設にも関与した山岡道武であった（**図 6**）。クペツィキーらがハルビンに来た時、山岡は、ソ連情報を担当する関東軍参謀部第 2 課参謀（情報主任参謀）であった[53]。山岡のクペツィキーらに接する態度は時に厳しいものであった。1939 年 6 月上旬、ハルビン特務機関まで呼び出されたクペツィキーらに対し、山岡は以下のような書類を読み上げた。

我々の大きな期待に反して、貴殿らは最初に我々の間で定められた取り決めに違反した。

一、貴殿らは我々が示す精神を出版資料として書く事に従わない。

二、貴殿らは、白系ロシア人が反ソ闘争に加わっていることを知りながら、彼らを攻撃した。

三、ソビエト崩壊に貢献するすべて人に、我々がそれを与えることができないことをよく知っているにもかかわらず、ソビエト連邦崩壊後のウクライナ人に対する一定の保証を求める。

四、反ソビエトの前線に立つ他のナショナリスト、つまりロシア人と協力したくない。

五、OUN 指導部は貴殿らを我々が自由に使えるようにした。一方、貴殿らは我々に従いたくない。

図 6　山岡道武

【出典】古澤隆彦氏蔵（古澤陽子氏提供）、1934 年頃、東京で撮影。

山岡は、読み上げたあと、クペツィキーらがその立場を維持し続けるならば、それは日本と OUN の間の合意の破綻、つまり裏切りとみなされると強く警告した[54]。

山岡の態度に代表されるように、クペツィキーらウクライナ民族主義者組織グループとハルビン特務機関の関係は絶えず良好であったとは言えない。同機関の思惑は、ウクライナ人居留民会だけではなく、ウクライナ民族主義者組織を白系露人事務局に協力させて運用しようと考えていたように思われる[55]。一方、クペツィキーらは、満洲の地でウクライナ・ディアスポラと連帯して、単独で反ソ活動や独立運動を展開できると考えていた。その思惑

は、日本人だけではなく、一部のハルビンのウクライナ人とも異なるものであった。次項では、交錯する彼らの関係について見てみたい。

（３）OUN・在満ウクライナ人・日本当局の関係

ハルビンの日本当局や満洲国外交部では1936年には、ウクライナ情勢にくわえて、在満のウクライナ人について調査を行い、詳細なレポートを作成していた。それによれば、ハルビンのウクライナ人は、ウクライナ民族の家を中心に、ウクライナ人居留民会、ウクライナ移民連盟などさまざまな団体が活動を行っていたが、ウクライナ独立派、帝政ロシア復興派などに分かれて内部対立が深まっていた[56]。またスコロパツィキー政権のウクライナ国で内務次官、郵政局長（閣僚）を歴任したが、ハルビンに亡命したのちは親ロシアに転じるヴィクトル・クリャブコ＝コレツキーがウクライナ人居留民会の副代表となり、主導権を握ろうと試みていた[57]。その最中に、ハルビンにやってきたのがクペツィキーら OUN グループであった。スヴィットは、1935 年に「極東に来た OUN メンバーのルコベンコとフェドリフは、極東で活躍するウクライナ人との相互理解を求めず、彼らをコントロールしたかっただけで、誤解を招いた」と書いている[58]。

クペツィキーの回顧録には、スヴィットについて『満洲通信』の「元編集者」であるとともに「ウクライナ国民（人民）共和国支持者（уенерівець)」と評されている。また、スヴィットとの個人的な関係についてはほとんど記載がない。一方、スヴィットの手記に「クペツィキー」としては全く登場せず、偽名の「マルキフ」として記載されている。クペツィキーによれば、スヴィットは「民族主義者がいなくなったら戦うことができず、すべてが崩壊するので、民族主義者と協力」したが、一方で「ハルビンのウクライナ国民（人民）共和国支持者からウクライナ民族の家を乗っ取った民族主義者への憎しみを心の中で育んだ」のであった[59]。このクペツィキーのスヴィット評からは、ハルビンにおける OUN 関係者とウクライナ国民（人民）共和国支持者との間でさまざまな思惑が交錯し、微妙な関係であったことが伝わってくる。

クペツィキーは比較的、日本当局と良好な関係を続けていたが、ファイダとフナティフは想像していたような活動ができないと分かると別々に行動するようになり、フナティフはハルビンを去り上海に向かった。1937 年初頭にウクライナ青年連盟などが改組する形でウクライナ極東シーチが設立された。ボクシングやサッカー等のスポーツ・クラブ、合唱、ウクライナ語教室、舞踏会、ピクニックの開催など、その活動は多岐に及び、ウクライナ人居留民会の行事にも積極的に参加した(図 7)。1938 年 6 月にクペツィキーが加入してからは、ウクライナ独立と対ソ闘争を目的として軍事訓練が始まった。同年 11 月にクペツィキーが代表に選出された。一方、クペツィキーは、ウクライナ人居留民会の合唱団に参加し、その代表となり、ウクライナ文化の普及活動に務めた[60]。

図 7　ウクライナ人居留民会のピクニック

【出典】レーシャ・ジュラ氏蔵（1939 年撮影、2 列目左から 2 番目がクペツィキー、3 番目は妻のタマラ）。

OUN、ウクライナ人居留民会の両方の活動はさらに活発化し、1939 年 5 月にコノヴァレツィの追悼コンサートを開催したほか、コノヴァレツィとシモン・ペトリューラの肖像や反ボルシェビキのスローガンの入った２つのリーフレットを発行し、ハルビン市内で配布した[61]。一方、OUN 内部でもクペツィキーとロマン・コルダ＝フェドリフ　（ミハイロ・ザティナイコ）が路線を巡って対立し、またクペツィキーとウクライナ人居留民会評議会のマルチーシンが対立した。いったんはウクライナ人居留民会評議会がクペツィキーをシーチの代表から解任したが、シーチ側は決定に従わなかった。結果、フェドリフが退任することとなり、クペツィキーらはウクライナ語のチラシの作成、配布を再開した[62]。

それらの動きに対して 1939 年６月頃から日本当局は圧力をかけはじめ、1939 年 8 月 10 日に、シーチのメンバーの会議が行われ 50 人以上の参加者が集まった際、全員ロシア人の満洲警察がやってきて、出席者を解散させた後に部屋を施錠した。また、同月に計画されていたウクライナ人居留民会の総会が開催されないことが判明した。総会を開催する許可はマエダが出したが、「上級当局」はそのような許可について何も知らされていなかったようであった[63]。12 月にはクペツィキーがシーチの代表でいることが許されず、その活動も合唱や舞台といった文化活動に限られた。しかし、1940 年 5 月 21 日、現地警察の命令によって、シーチは違法活動を行っている組織として解散させられた。一部のメンバーは、その後も非公式に活動を続けた[64]。クペツィキーは 1940 年 9 月初旬に白系ロシア人の警察官によって召喚され、8 日間拘束されたが、外事担当のサカイから「警察に反抗している印象があった

が、それはロシア人に対してのみと分かった」と告げられ釈放された[65]。

クペツィキーは1939年中頃から、ウクライナ人のシライが経営するタクシー会社で運転手として働き始め生計を立てる一方（**図8**）[66]、1942年にはOUN機関紙『スルマ』の出版を試みたが、赤木の反対で継続されなかった。1944 年4月には、クペツィキーはウクライナ人居留民会評議会の書記に選出されたが、日本当局とは以前のような目立った協力はないまま終戦の日を迎えるのである。

図8　タクシー運転手時代のクペツィキー（前列右）

【出典】レーシャ・ジュラ氏蔵。

４　むすび

本稿では、日本やハルビンにおけるウクライナ民族主義者グループとハルビン特務機関との関係を未公開の写真も用いて検討した。最後に、その後のクペツィキーと、OUN と日本当局についてもう一度整理し本稿を終えたい。

ハルビンを脱出したクペツィキーは天津に到着し、その後、上海に向かった。上海では1947 年冬から、アメリカ軍憲兵隊の補助員や連合国復興救済機関 UNRRA の警備員としても働く一方（**図9**）、ウクライナ蜂起軍 UPA や OUN の在外組織の幹部であったミコラ・レ

ベドと連絡を取ることに成功し、UPA を支援するための集会を開催した[67]。1948 年 1 月 4 日、クペツィキーはサンフランシスコ経由でカナダに向けて出発した[68]。 1948 年春に、カナダのサスカチュワンに到着し、同年夏からトロントに住んだ（**図 10**）。1974 年まで州の郵便局で働いた。また、出版社「Homin Ukrainy（Ukrainian Echo）」を共同設立し、ウクライナのボーイスカウト運動プラストと青年組織 SUM（СУМ）の幹部も務めるなどウクライナ系の活動に積極的に参加した。回想録『日出ずる処』は 1957 年 2 月 3 日に書き終えているが、1988 年になって出版された[69]。その中でクペツィキーが記した日本人の名前はほとんど姓のみの記載で大半が身元不明であったが、満洲国の『官吏録』や関東軍情報部の名簿などを用いて分析したところ、多くの官姓名が分かった。クペツィキーやスヴィットが「イノウエ」と記載した人物が井上喜久三郎と一致したことからは、彼らの手記における日本人に関する記述が正確であることも裏付けられた。

図 9　上海のクペツィキー（右から 3 番目）

【出典】レーシャ・ジュラ氏蔵。

図 10　カナダでのクペツィキー（右から 3 番目）

【出典】レーシャ・ジュラ氏蔵（1948 年頃）。

クペツィキーの回顧録から伝わってくるのは、OUN とウクライナ国民（人民）共和国支持者が主導権を握っていたウクライナ民族の家・ウクライナ人居留民会との関係は、ときに緊張をはらむものであったことである。クペツィキーらのハルビン到着は、それまでウクライナ独立派と帝政ロシア復興派などの間で内紛が激化していた時期でもある。彼らのハルビン到着はウクライナ人居留民会やウクライナ民族の家の運営にも影響を与えた。

また、回顧録からは、満洲国や日本の当局、とくにハルビン特務機関の関係者の中でもウクライナ民族主義者グループへの評価が、個人や時期によって分かれていたことが窺える。白系ロシア人やロシア・ファシスト党を重用する立場からすると、ポーランド政治家の暗殺やホロドク郵便局襲撃事件に参加した彼らは、反ロシアの「過激派」であった。当初、彼らの受け入れを担当した鵜飼にくわえ、赤木、井上、澤田らはクペツィキーに理解や個人的な友情を示す一方、直接の担当者であった赤木ですら、ときにハルビン特務機関との軋轢を恐れて、クペツィキーらの反ロシア姿勢に異議を唱えることもあった。

スヴィットは「1936 年半ばに、日本の政治の緩やかな変化は、ほとんど目に見えず起こった。ハルビンでも…日常生活や現実との闘いの中でそれらを感じていた…日本の政策が満州で変わりつつある雰囲気の中で、OUN メンバーはハルビンで活動を始めた…日本人がそれについて彼らに話さなかったので…彼らが真の地元の政治情勢を知らなかったのは驚くことではない」と述べている[70]。対米戦争の可能性が高まる中、日ソ中立条約も締結され、

日本当局はハルビンでもソ連を刺激する活動を制限するようになった。当初の歓迎ムードから42年頃の支援の打ち切りといった激動の世界情勢に呼応するかのように目まぐるしく変化する日本当局の態度に対し、クペツィキー自身、その理由が最後まで分からないままであった。

クペツィキーは、ウクライナ極東シーチを中心にウクライナ人居留民会やウクライナ民族の家の活動に積極的に参加した。とくに合唱や演劇を通じた活動は、OUNを警戒するウクライナ人の心を和らげるのに一役買った。しかし、ウクライナ民族主義者組織とハルビン特務機関などの日本当局との協力については、ふたたび深まることはなかった。

両者の距離が最も近づいたのは、1945年8月13日、ソ連軍が迫る中、クペツィキーらが特務機関の用意した特別列車でハルビンを脱出する直前であったのかもしれない。ハルビン特務機関最後のウクライナ担当者であった松坂は、自分は他の日本人と共に残留する旨を告げ、「なぜ今あなたを救おうとしているのか、一つだけ理由をお話できます。あなたがウクライナ民族主義を選んでからの一貫性と不屈さ、意志の堅さ、そして目標へと向かって真っ直ぐな道を歩んできたからです。もしあなたが日本人だったら、おそらくサムライの出身でしょう」と涙ながらに語った。初めて涙する日本人を見たクペツィキーは、ウクライナ・コサックの習慣に従って３回抱擁したのち、「命を救ってくれてありがとう。日本よ、永遠なれ、バンザイ・ニッポン！」と叫んだのであった[71]。

※このワーキングペーパーは、『東洋研究 «Сходознавство»』（ウクライナ国立科学アカデミー・クリムスキー記念東洋学研究所発行）88号にウクライナ語論文として掲載予定である。同研究所にはプレプリントとして日本語での公開を承諾いただいた。
※フリホリー・クペツィキーの子女レーシャ・ジュラ氏には未公開の写真を含めた史料や情報をご提供いただいた。ここに記して感謝申し上げたい。

1 2019年に短編の再現ドキュメンタリー映画『不屈』（ミハイロ・フレディリ監督作品）、2020年には長編映画『Екс（襲撃）』（セルヒー・リセンコ監督作品）が公開されている。

2 戦後のOUNと西側情報機関との関係については以下が詳しい。Ruffner, Kevin C., ‘Cold War Allies: The Origins of CIA's Relationship with Ukrainian. Nationalists’, *Studies in Intelligence*, Washington, 1998（Series: Second Release of Subject Files Under the Nazi War Crimes and Japanese Imperial Government Disclosure Acts, ca. 1981 - ca. 2003
Record Group 263: Records of the Central Intelligence Agency, 1894 – 2002, National Archives and Records Administration. https://catalog.archives.gov/id/19074319　最終閲覧日：2021年8月13日）。

3 鈴木健二『駐独大使大島浩』芙蓉書房、1979年、92〜93頁。シナン・レヴェント『日本の〝中央ユーラシア〟政策—トゥーラン主義運動とイスラーム政策—』彩流社、2019年、212頁。また大島は駐独大使就任後に、ドイツに亡命中であったウクライナ国ヘーチマンのパウロ・スコロパツィキーとも連絡を取っていた。田嶋信雄『日本陸軍の対ソ謀略—日独防共協定とユーラシア政策』吉川弘文館、2017年、156〜157頁。

4 Sych, O., ‘Japan in the Liberation Concept of the OUN in the Postwar Period’, *Kobe Gakuin Economic Papers*, 2015, p.11.

5 Посівнич М, Українська національна колонія в Манджурії у 1920 – 1945 рр. // Наукові записки [Національного університету "Острозька академія"]. Історичні науки. - 2010. - Вип. 15. - С. 43-54.

[6] 黒川『物語　ウクライナの歴史』218〜220 頁。

[7] Мірчук П. Нарис історії Організації Українських Націоналістів. Перший том. 1920-1939 // За редакцією С. Ленкавського. Українське видавництво. Мюнхен - Лондон - Нью-Йорк, 1968. - 640 с.

[8] なお、ジュラは、クペツィキーの母クセニア・クペツィカの旧姓である（レーシャ・ジュラ氏より聞き取り）。

[9] Купецький Г. Там де сонце сходить. Спогади бойовика ОУН на Далекому Сході // Торонто, 1988. – 498 с.

[10] Світ І. Українсько-японські взаємини 1903–1945 (Історичний аналіз і спостереження) // Іван Світ. – Нью-Йорк : Українське історичне товариство, 1972. –371 с. – (Серія: Мемуаристика, ч. 3).

[11] Мірчук, П. Нарис історії Організації Українських Націоналістів. Перший том. 1920-1939 … – С.301– 304.

[12] Там само. С. 301-304.

[13] Купецький Г. Там де сонце сходить… – С. 15-20.

[14] 極東の OUN 活動家。1930 年代初頭、彼はブルノ（チェコスロバキア、現チェコ）の OUN 支部長であったが 1934 年にイギリスを経由してオランダへ活動の場を移し、1936 年からハルビンに来た。チューリン商会のトラック運転手として働きながら、ウクライナ人居留民会で活発に活動した。1942 年 5 月からはクペツィキーやファイダとともにハルビン近郊の難民キャンプのウクライナ人に対する活動を行った。 1945 年ソ連の満洲侵入後も逮捕を逃れ、1954 年に彼は香港経由でウルグアイに渡った。Чорномаз. В. Українці в Китаї (перша половина XX ст.) : енциклопедичний довідник // Укл. В. А. Чорномаз. – Одеса, Видавничий дім «Гельветика», 2021. – С. 449–450.

[15] 1909 年スタニスラウ（現イヴァノフランキフシク州）生まれで極東の OUN の活動家。コノヴァレツィによって満洲に送られ、1936 年 6 月にベルリンからハルビンに到着した。英国市民権を持っていた。1937 年から 39 年にかけてウクライナ人居留民会の要職を歴任した。 1937 年からは極東シーチでの軍事訓練も行った。シーチの機関紙『極東ナショナリスト』の共同編集者でもあった。その後、シーチ内の路線対立から 1940 年代初頭には上海に移った。そこでもウクライナ人社会で活動を続け、1941 年 7 月に発行が始まった英字紙新聞「The Call of the Ukraine」の創刊号に記事を書いた。1952 年 5 月 4 日に逮捕され、ソ連に強制送還され同年 6 月 20 日、彼はスパイ活動と「ハルビンの反ソビエト組織ウクライナ極東シーチ」の創設の罪でモスクワ軍管区軍事法廷から死刑判決を受け同年 8 月 26 日にモスクワで銃殺された。2001 年 3 月 14 日に、ロシア連邦検察庁によって名誉回復された。Чорномаз. В. Українці в Китаю (перша половина XX ст.) …– С. 106–107.

[16] Купецький Г. Там де сонце сходить…– С. 21. Світ І. Українсько-японські взаємини 1903–1945... – С. 200.

[17] Там само. С. 22. 1946 年 4 月 11 日、モスクワで行われたロシア・ファシスト党首コンスタンティン・ロザエフスキーの尋問記録によれば、ハルビン特務機関によりロシア・ファシスト党のリーダーであったマスラコフ・マトベイ・プラトノヴィチ指導下の特別隊が編成され、ソ連への越境、偵察、テロ活動が行われていた。JACAR（アジア歴史資料センター）「A級極東国際軍事裁判記録（和文）（№ 29）」A08071279500（第 4、8~11 画像）平 11 法務 02068100（所蔵館：国立公文書館)。

[18] Купецький Г. Там де сонце сходить… – С. 89–90.

[19] Там само. С. 96–100.

[20]『帝国陸軍将軍総覧』秋田書店、1990 年、440 頁。山本武利『陸軍中野学校－「秘密工作員」養成機関の実像』筑摩選書、2017 年、42〜53 頁。斎藤充功『日本のスパイ王：陸軍中野学校創設者・秋草俊少将の真実』GAKKEN、2016 年、26 頁。なお、ハルビン特務機関は、1940 年より改組され関東軍情報部となるが、改組後も旧名で呼称されることが多かった。本章では特に説明が必要な場合を除き、ハルビン特務機関と記載した。

[21] Купецький Г. Там де сонце сходить… – С. 108–110.

[22] Там само. С. 112.

[23] Там само. С.111.

[24] Там само. С. 137–142.

[25] 関東軍参謀部「入蘇入満調査」（1938 年）、粟屋憲太郎、竹内桂編『対ソ情報戦資料第 2 巻：関東軍関係資料(2)』、現代資料出版、1999 年、117 頁。

[26] Chashchin, K., *Russians in China. Genealogical index (1926-1946)*, South Eastern Publishers Inc 2014, p. 346.

[27] 『ウクライナ・日本語辞典』の言語学的な分析については以下を参照。Малахова Ю. Структура словникових статей першого українсько-японського словника Анатолія Діброви та Василя Одинця // Вісн. Київ. нац. ун-ту імені Тараса Шевченка (Східні мови та літератури). – К. : ВПЦ "Київський університет", 2014. – Вип. 1(20). – С. 25–28. 日野貴夫、 I. P. ボンダレンコ「『ウクライナ・日本語辞典』の半世紀」『外国語教育 ： 理論と実践』20 号、1994 年。クペツィキーもティシチェンコがウクライナ人女性と結婚後、クヴィチェンコと名乗ったと記している。Купецький Г. Там де сонце сходить… – С. 265–268.

[28] Купецький Г. Там де сонце сходить… – С. 266.

[29] 「対蘇諜報機関強化計画」(1935 年)、粟屋憲太郎、竹内桂編『対ソ情報戦資料第 1 巻：関東軍関係資料（１）』現代資料出版、1999 年、462 頁。

[30] 「陸満密大日記(昭和 10 年)」、粟屋、竹内編『対ソ情報戦資料第 1 巻：関東軍関係資料(1)』436 頁。

[31] Світ І. Українсько-японські взаємини 1903–1945... – С. 222.

[32] なお、スヴィットによれば翻訳は未完・未刊であった。

[33] 満洲国国務院総務庁編『満洲国官吏録：康徳 6 年 4 月 1 日現在』1939 年、186 頁。なお拙著『日本・ウクライナ交流史 1915–1937 年』執筆時点では発見できていなかったため「イノウエ」とのみ記載した。

[34] 「留守名簿／関東軍情報部五十音人名簿／721」国立公文書館、平 25 厚労 01576100、11 頁。この名簿を使用した研究としては山本武利の中野学校に関する優れた研究がある。この名簿は 1945 年 7 月頃作成の外地にあった部隊の軍人・軍属の記録である留守名簿を基に、第一引揚局と引揚援護局が、関東軍情報部全員の終戦以降の消息を書き加えたもので 3113 名の名前がある（山本武利「関東軍情報部と陸軍中野学校の関係―公開された「関東軍情報部五十音人名簿」と引揚者「身上申告書」の分析」諜報研究会 2017/9/30 報告資料 URL: http://www.npointelligence.com/NPO-Intelligence/study/pic2003.pdf 最終閲覧日：2021 年 4 月 24 日）。

[35] 井上は、表面上は、哈爾賓高等法院の翻訳官であったが、関東軍情報部（ハルビン特務機関）の名簿にも記載されている。兵種・階級欄はともに空欄である。この事例は、満洲における日本の諜報活動の実態を見る上で非常に興味深い。

[36] 「ソ連抑留者の遺品など還る／議員団に抱かれて／あす、日赤病院で報告会」『朝日新聞』1955 年 10 月 8 日 7 面。

[37] Купецький Г. Там де сонце сходить… – С. 162.

[38] 西原征夫『全記録ハルビン特務機関：関東軍情報部の軌跡』毎日新聞社、1980 年、177 頁。

[39] John. J. Stephan, The Russian Fascists: Tragedy and Farce in Exile, 1925-1945, New York: Harper & Row, 1978, pp. 329-330.　斎藤充功『日本のスパイ王：陸軍中野学校の創設者・秋草俊少将の真実』Gakken、2016 年、175 頁。なお白系露人事務局の参与でもあった。
[40] 西原『全記録ハルビン特務機関』177 頁。
[41] 川原衛門『関東軍謀略部隊』プレス東京、1970 年、149 頁。
[42] 「関東軍情報部五十音人名簿」国立公文書館、4 頁。
[43]『スルマ』は、UVO と OUN 機関紙で、1927 年 1 月 1 日から、主に 1927 年から 1928 年にかけてはベルリンで、1928 年から 1934 年にはカウナスで発行された。ウクライナでは違法に配布され、発行部数は約 10000 部であった。Архів ОУН（The Ukrainian Information Service, URL: http://ounuis.info/library/newspapers/630/surma.html　最終閲覧日：2021 年 5 月 23 日）。
[44] 哈爾濱保護院と思われる。西原『全記録ハルビン特務機関』243～247 頁。1942 年 6 月頃の院長は前田瑞穂であった。同 244 頁。
[45] Купецький Г. Там де сонце сходить… – С. 316.
[46] Там само. С. 393－394.
[47] スヴィットによれば、この列車はハルビン特務機関によって関係者の脱出用に用意されたが、多くのウクライナ人は途中でソ連軍に捕まるのを恐れて乗らなかった。また、ハルビンを出発したのは 8 月 13 日 13 時頃であった。一方、川原衛門の著作では、特務機関が満鉄に交渉して特別列車を編成させ、兵 2 名を同乗させて、ハルビン駅を出発したのは 8 月 12 日 13 時頃となっている。Світ І. Українсько-японські взаємини 1903–1945... – С. 350. 川原『関東軍謀略部隊』144 頁。
[48] 満洲国国務院総務庁編『満洲国官吏録：康徳 5 年 4 月 1 日現在』1939 年、351 頁。
[49] Купецький Г. Там де сонце сходить… – С. 218–219.
[50] Там само. С. 248.
[51] 横道河子地方警察学校の前身は露人森林警察隊であり、その他に牡丹江省、濱江省、三江省にわたり 9 隊が置かれ、各隊 30～40 名、隊長は警佐があたり、匪賊討伐、ケシ栽培取締りを任務としていた。その後、浅野部隊や在満白系露人部隊などに形を変え終戦を迎えたという。西原『全記録ハルビン特務機関』276 頁。
[52] Купецький Г. Там де сонце сходить… – С. 252.
[53] 西原『全記録ハルビン特務機関』178 頁。山岡道武『ジューコフ国防相』『人物往来』4 巻 4 号、1955 年、33 頁。
[54] Купецький Г. Там де сонце сходить…– С. 196.
[55] 白系露人事務局長の諮問会議としてウクライナ人、ユダヤ人、トルコタタール人、アルメニア人、グルジア人の「民族会議」が設置されていた。西原『全記録ハルビン特務機関』210 頁。
[56] 岡部芳彦『日本・ウクライナ交流史 1915 –1937 年』第 3 章を参照。
[57] ヴィクトル・クリャブコ＝コレツキーはハルビンでは聖ウラジーミル大学、北満学院で工学部長等を務め、その後、白系露人事務局設立後は、ウクライナ系住民の同事務局への登録を促すなど全面的に協力した。1940 年にはハルビン特務機関によってウクライナ民族の家代表、ウクライナ人居留民会議長に任命されている。クペツィキーは、クリャブコ＝コレツキーを「小ロシア人」と記している。Попок А. А. Кулябко-Корецький Віктор // Енциклопедія історії України : у 10 т. / редкол. : В. А. Смолій (голова) та ін. ; Інститут історії України НАН України. – К. : Наук. думка, 2009. –Т. 5 : Кон – Кю. – С. 492.
[58] Світ І. Українсько-японські взаємини 1903–1945... – С. 198.
[59] Купецький Г. Там де сонце сходить… – С. 460.
[60] Там само. С. 208.
[61] Там само. С .254.

[62] Чорномаз. В.Українці в Китаю (перша половина ХХ ст.) …– С. 317.
[63] Світ І. Українсько-японські взаємини 1903–1945... – С. 288.
[64] Чорномаз. В.Українці в Китаю (перша половина ХХ ст.) …– С. 317－318.
[65] Купецький Г. Там де сонце сходить… – С.268 –278.　なお、サカイはハルビン警察庁警尉の酒井種八と思われる。国務院総務庁人事処編『満洲国官吏録：康徳 6 年 4 月 1 日現在』明文社、1939 年、599 頁。
[66] タクシー会社の経営者は Ширай Павел Семенович と思われる。クペツィキーによれば、ウクライナ語を少ししか知らないウクライナ人で、車は 5 台、整備士が 3 人で、小さな車の修理用施設もあった。Купецький Г. Там де сонце сходить… – С. 256.　Chashchin, Russians in China. Genealogical index (1926-1946), p. 894.
[67] Купецький Г. Там де сонце сходить… – С. 459 – 463.
[68] Там само. С. 469.　横浜を経由したが上陸はしていない。
[69] Чорномаз. В.Українці в Китаю (перша половина ХХ ст.) …– С. 115.
[70] Світ І. Українсько-японські взаємини 1903–1945... – С. 200.
[71] Купецький Г. Там де сонце сходить… – С. 387.